

天童遊戯

祭り当日、十江山麓十江神社。

煌々と篝火が焚かれた境内は、腕章を巻いて運営に携わる有志と、はるばる見物にきた観光客でごった返していた。

「無事開催できてよかったわい」

「年々過疎化少子化が進んでますからなあ。時代の流れとはいえ世知辛いです」

「今年の参加者は隣の町や村からかき集めてきたとか」

「ギリギリ頭数を揃えました」

「練り歩くのなら最低十人おらんと格好付かんわな」

紙コップに地酒を注ぐ老人のぼやきに、パイプ椅子に掛けた仲間が頷く。

「権現様にも少しは融通利かせてほしいもんです、全く」

「しつ、バチが当たりますよ」

十江村の北方には山があり、苔むした石段の終点に十江神社が建っている。

村の顔役が采配を振るうなか、和太鼓や箏篳が祭囃子を奏じ、神楽殿で神楽が奉納される。

橙色の火の粉が爆ぜ、神々しく闇を照らす。

翁の能面を被った舞い手が足踏みし、中央の獅子あぎとが顎を開け閉め、雄渾に躍動する。

たてがみを打ち振り暴れるこの獅子を、山伏神楽では「権現様」と呼び慣らわす。

テントの下には婦人会の面々が集まり、出番が来るまで待機を命じられた稚児たちに、甘酒をふるまっていた。

「わくわくいい匂い」

「これ何？」

「子供が飲んでも大丈夫なお酒よ。熱いからよくふーふーしてね」

「はあ〜いい」

コンロにかけた寸胴鍋から灰白い湯気が立ち上る。

初老の婦人がお玉ですくった甘酒を紙コップに注ぎ入れ、押し合いへし合い並ぶ子供たちに配っていく。

子供たちの装いは今宵の神楽の主役以上に見物人の目を引いた。

男の子は緑の袴に烏帽子、女の子は赤い袴に唐草模様を透かし彫りした天冠てんかんを付け、額の中心に位星ゐいせいを点じ、鼻筋に

白粉を刷り込んでいる。

薄墨で曳いた麻呂眉とほんのり色付く唇の紅は、幼い顔にやんごとなき気品を与えていた。

山伏神楽と稚児行列はかれこれ三百年続く十江村の伝統である。

神楽を奉納したあと、稚児たちは男女対の二列となって神

社を発ち、村の家々を回ってまた帰ってくる。

地方の例にもれず、十江村の住人の過半数は高齢者だ。今年は子供不足で稚児行列の実現が危ぶまれたものの、周辺の市町村から参加者を募り、どうにか開催に漕ぎ着けた。

「よその地域じゃ五歳から十歳まで幅広くとるらしいぞ、うちもそうしたらよかるうに」

「村のしきたりじゃからな」

「七ツまでは神の子というし、七つて数が特別なんでしょね」

老人たちが屯って話し込む間、稚児たちは続々と出発の準備を整えていた。

頭に戴く烏帽子や天冠の傾きを直し、顎の下で紐を結ぶ。

自分では上手くできず保護者に手伝ってもらっている子ども多い。

「紐が斜めってるぞ、みどり。父さんが結んでやる」

「うん」

今しも父親が跪き、こんがらがった紐をほどいて、紐を結び直してやってる。

微笑ましい光景を目にし、村の顔役や婦人会の面々が相好を崩す。

娘の艶姿を見直し、父親が満足に頷く。

「よし。言うことは」

「ありがとうございます」

「よくできました」

二十代後半の父親が娘の髪のを愛情深くかきまぜる。紙コップに甘酒を注いだ主婦が二人に近付いていく。

「吉田さんとみどりちゃんもどうぞ、温まりますよ」

「ありがとうございます、ごちそうになります」

「ありがとうございます」

「本当に礼儀正しいわねえ。お父さんの躰がいいのね、きつと」

主婦が感心したように目を丸くし、吉田に向き直る。

「奥さんが亡くなつて丸一年？ 一人でよく頑張ったわねえ、偉いわよ。あたしんちのぐうたら亭主に爪の垢でも煎じて飲ませたい」

「みどりの事をよろしく頼むつて妻にお願いされちゃいましたしね」

「まだ若いのに癌だなんて気の毒に。みどりちゃんも寂しいでしょ」

みどりが唇を噛み締め、首を小さく横に振る。

「……お父さんがいるからさびしくない」

「みどり……」

感極まった吉田がみどりを抱き寄せ、主婦が涙を拭い話を変える。

「稚児行列は初参加だっけ」

「うちの子もやつと七歳になったんで。村に越してきてからずつと楽しみだつたんですよ」

吉田家はスローライフに憧れ十江村に移住したものの、去年の春に妻の真由美が癌を患い他界。現在は父子家庭だ。

「小さい子の夜歩きは危ない、やめろつて声もあるんだけどねえ。何百年も続けてきたのに、私たちの代で打ち切れないでしょ」

「東京ならいざ知らず、十江村で事件や事故が起きるなんて想像できません」

「そうよねえ、心配しすぎよねえ。お目付け役の大人も同行するんだし」

「おばちゃん、おかわりー」

「はーい、今行くから待っててー」

主婦が気忙しげに離れていく。

にこやかに見送つた吉田が、どことなく不安げなみどりの肩を叩いて励ます。

「この中じやみどりが一番美人さんだ。父さんはここで待てるから、胸を張って行って来い」

「……うん」

携帯のフラッシュが焚かれ盛大な拍手が湧く。神楽殿の袖

に踊り手が引つ込み、権現様が退場していく。みどりは虚ろな目で獅子を見詰める。

その様子を遠巻きに眺め、甘酒を給仕する主婦たちが、気の毒そうに囁き交わす。

「可哀想ねみどりちゃん、お葬式からこつちすつかり塞ぎこんじゃって」

「前はもつと明るくてよく笑つたのにねえ」

「無理ないわよ、まだまだ甘えたい盛りでお母さんと引き離されたんだもの」

「神様も残酷よね、どうせなら口うるさい年寄りから連れてきやいいのに。うちの鬼姑とか」

「やだわ伊藤さん！」

「偉いのは吉田さんよ、抗がん剤の副作用に苦しむ奥さんを献身的に介護して」

「家と職場と病院の往復だけで大変なのに、奥さんの看病とお子さんの世話まで」

「優しい旦那さんに看取ってもらえて、繭子さんは幸せ者だわ」

吉田親子に同情する主婦たち。華やかな装いと裏腹に、みどりは所在なげにたたずんでいた。

「稚児行列のおなくりく」

先頭に権現様を押し立て、二列目に鉦かねと提灯を持った大人

が続き、三列目に男女対の子供たちが並んだ行列が出発する。

子供たちは背が大きい順に配置され、同年代に発育で劣るみどりは殿を務めていた。

甲高く澄んだ鉦の余韻が、殷々と夜の静寂を引き伸ばす。

鉦の単調な響きに合わせ、稚児行列はしずしず進む。大半は神妙な顔をしているが、こつそりあくびをもらす子もいるのはご愛敬。

「おな〜り〜」

鉦の音が膨らみ、稚児たちが闇に溶け入る。

畏まって石段を下りてく我が子の背中を、ある親は誇らしげに、ある親は心配げに見送っている。

吉田はストラップで首から下げた、一眼レフのシャッターを切る。隣の母親が羨む。

「立派なカメラですね」

「下手の横好きですよ。写真が趣味なもので」

笑ってごまかしフラッシュを焚く。

妻の忘れ形見である愛娘の晴れ姿を、余さずフィルムに焼き付けたい。

「七歳でいられるのは今だけですから、記念に残してあげたいんです」

また一枚コレクションが増えるとはくそ笑み、両手に構え

たカメラを下ろす。

石段の沿道には等間隔に篝火が燃え、扇を持って歩む子らの顔を幽かな陰影が隈取る。

稚児行列は神社を起点に家々を回る。村人たちは愛くるしい稚児を出迎え寿ぐ。

「十江村名物、稚児行列の成り立ちをご存知ですか」

後ろ手を組んだ村長の問いに、うる覚えの知識を掻い摘んで答える。

「ええと……十江山に棲む獣面の神が、里の子供をさらって食ってたんですよ」

「そうじゃよ。ご先祖様は山神を鎮めるために社を建て、祭りのたびに生贄を一人捧げる事にした。選ばれたのは七歳の子ども。七ツまでは神の子、あの世に返しても諦めが付く」

「惨い話ですね」

「山神の祟りは恐ろしいからの、それしか手立てがなかったんじゃ。怒りに触れば日照りが続いて作物が枯れる、百姓には死活問題。もとより十江村は沿岸から遠く離れた辺境の地、遠い江の村と書いて遠江村からきとる。山神の機嫌を損ねるのは禁忌とされた」

稚児行列の最後尾が視界から消える。

「ところが、これに異を唱えた男がいた。恋女房に先立た

れ、その忘れ形見を育てていた父親じゃ」

「彼はどうしたんですか」

「娘を生贄に捧げるなんてとんでもないと抗い、十江山で修行しとった山伏に泣き付いた」

「一呼吸おき、闇に沈む山を振り仰ぐ。」

「十江山のてっぺんに寺があるのが見えるかね」

「ああ……言われてみれば、ほんの少し瓦屋根が覗いてますね」

「山伏のねぐらさ」

「お祭りに参加してるんですか？」

「あそこに」

高軒が轟く方に向き直れば、一升瓶を抱えた中年男が大の字になっていた。

結袈裟の梵天と呼ばれるぼんぼりの房を下げた白装束と一本歯の下駄は、山伏の特徴だ。ずんぐりした猪首には縞黒檀の念珠が巻かれている。

「地べたで寝たら風邪ひいちゃいますよ、すすはち煤祓さん」

「ん〜いいじゃねえかもう一杯」

「お酒は全部飲んじゃったでしょ」

「じゃあ甘酒でいいや」

「子供たちにあげちゃったんでありません」

「鍋底にこびり付いた酒粕でいいからさ〜頼むよ〜。俺が

下山すんのなんてせいぜい年イチじゃん、ツレねえこと言いなさんなって。ご先祖様のお手柄に免じてなっ、このとおり！」

不機嫌な主婦と平身低頭の山伏を見比べ、吉田の目が疑い深く細まる。

「本当に山伏なんですか？」

「先代はもつとお固い人だった」
村長が苦笑いする。

「東北は羽黒修験道が有名だが、煤祓さんとははぐれ山伏だね。とはいえ鎌倉時代からこの地に根を下ろした古い一族だ」

「聞いたことあります。全国の霊山を行脚する山伏は、関所の通行税や渡し舟の運賃を免除されたんですよ。宇治拾遺物語に祈りで渡し舟を呼び戻すエピソードが載ってます」

「よく知つとるね」

「大学じゃ日本史専攻だったんで。レポートを書きました」

「当ても宿所や食糧は施しに頼ったそうじゃし、アレは先祖返りした正しい姿と言えなくもないな」

寸胴鍋を舐め回す山伏の後ろ襟を、無造作に伸びた手が引つ張る。

後ろで待ち受けていたのは十代後半の青年。

「恥かかすんじゃねえクソ親父、とつとと帰るぞ」

「んだと馬鹿息子、祭りの日位無礼講でいいじゃねえか。ていうか手ぶらかよ、九州遠征の戦利品の福岡産大吟醸はどうした」

「テメエが勘当した倅に酒をねだるたあ、アルコールが頭に回つちまつたみてえだな」

山伏と口論する青年を見て、村長が驚く。

「おや、玄くんじゃないか。列島縦断バイクの旅から帰還したのか」

「ということは、石段下の単車は彼の」

「貯金をはたいて買ったらしい」

みどりを連れて神社に来る時、傍らに泊まっていたハーレーダビットソンを思い出す。操縦桿にはフルフェイスのヘルメットがぶら下がっていた。

ワックスでテカるライダーズジャケットに身を包み、野性的なウルフカットを金髪に染めた若者の胸元には、妙に角張つた大粒の念珠が揺れている。

「親子二代で山伏？」

「先祖代々ね」

「山伏って妻帯していいんですしたっけ」

「煤祓さんとは世襲制だねえ。玄くんは後継ぐの嫌がつとるが」

見た目は暴走族上がりのチンピラ。頬骨が高く張つた顔立ちと険しい眼光に、生来の痲癖の強さが浮き出ていた。言動も粗暴だ。みどりを近付きたいタイプではない。

村長がフォロウするように付け足す。

「今となつてはただの酒飲みだが、あの人の先祖が山神に掛け合い、娘を取り戻したと言われとる。十江村が崇める権現様即ち山神の化身、稚児行列は生贄の吊いの為に始まつたんだ」

「へえ、勉強になります」

稚児行列の謂れを知つて素直に感心する。ホームページにはそこまで詳しく書かれてなかつた。

村長が言い淀む。

「この話には後日談があつてな」

「はい？」

「いや、忘れとくれ。若い人は知らん方が幸せな話じゃ」

「気になりますね、何ですか」

とぼける村長を追及する吉田。

さらに食い下がろうとした矢先、不穏なざわめきが伝つて来た。

「どうした？」

「子供が消えた」

「迷子？」

「そんなはずは……」

「誰？」

「一番後ろの女の子」

「みどりちゃん？」

「確かにいたのに」

娘の名前が出、心臓が止まる。

「落ち着け、よく捜せ」

「はぐれたの？」

「馬鹿言うな、一本道だぞ」

「みどり！」

吉田が血相変えて駆け出す。動揺も露わに村長が後を追ひ、顔役たちがぞろぞろ続く。

その横を全速力で駆け抜け、石段下にとめたバイクに跨った玄が叫ぶ。

「親父！」

「早く出せ！」

山伏が身軽に跳躍し、シート後方に飛び乗る。

アクセルを踏みバイクを出す。周囲の景色が残像と化し飛び去る中、エンジン全開で畦道を飛ばす。

猛然と風切り先行する玄たちの耳に、夜風に乗じた号泣の切れ端が届く。

「ええくんええくん」

「おかあさくん、おとうさくん」

「真っ暗で怖いよオ。おうち帰りたい、ぐすつ」

民家の庭に面した道に子供たちが立ち尽くし、あるいは座り込んで泣きじゃくっている。

玄がブレーキをかけるや山伏が飛び下り、引き戸を開けて行列をもてなしていた家主の老婆に聞く。

「何があつたんです」

「あたしも何が何だかさつぱり……稚児さんたちをお迎えて、一人一人頭をなでて送り出そうとしたら、一人足りない事に気付いたんです。ほら、稚児行列つて男女ペアでしょ？　なのに男の子だけポツンで。女の子はどこつて聞いても要領得なくて、みんなパニックになつちやつて」

途方に暮れた老婆の正面では、ペアの片割れの男の子がぎよんとんとしていた。隣の地面に扇が落ちてゐる。

玄が男の子の肩を掴んで問い質す。

「一緒にいた子はどこだ？」

「わ、わかんない……」

「手を繋いでなかったのか」

「よせ玄」

山伏が息子と立ち替わり、強面を崩して笑みかける。

「安心しろ坊主、お父さんお母さんがこつちに向かつてる」

「ホント？」

「おつちやんを信じろ」

その言葉に安堵したのか、男の子がたどたどしく紡ぐ。

「あのね、後ろ、なんかいた」

「後ろ？」

闇に目を凝らす。そこには何も無い、田園を割り畦道が敷かれてるだけ。

膨らむ疑念を感じ取ったか、男の子が涙ぐんで釈明する。

「ホントだよ、ずうつと付いてきたんだ。歩ってる間はおしゃべりしちゃだめって言われたから、大人のひとにも言えなかつたんだ」

「神社を出た時から？」

「たぶん……気付いたらもういた」

父と顔を見合わせ、今度は玄が質問する。

「人間？ 男、女、どっちだ」

「ごんげんさま」

男の子が慄く。

「へんな影が見えた。ごんげんさまに似てた。たてがみがふさふさして、伸びたり縮んだりして、だんだん近付いてきたの」

「権現様は前にいたろ？ ありやただの被りもんだ」

「うそじゃないよ、後ろではっはっ息してた。わざと手をはなしたんじゃないもん、みどりちゃんが急に立ち止まったんだ。早く行こつて引つ張つたのに全然動かなくて、ぼぼくのせいじゃないもん」

「わかつた、坊主は悪くない」

男の子を慰め顔を上げれば、稚児行列を率いる権現の中身が、被り物を脱いで子供たちを宥めていた。

行列に随伴していた大人数名が山伏に駆け寄り、失踪時の状況を伝える。

「完全にワシらの落ち度です、夜道の暗さと相俟ってしんがりへの注意が疎かになっていた」

「提灯だけじゃ心許ないって言ったのに」

「出発前に点呼をとつたら一人だけ返事がせんで」

「しつかり手を繋がせとつたのに」

「待て、一斉に言われてもわけわからんぞ」

困惑する山伏。

頭を抱えて蹲る男たち。それぞれの顔に浮かぶ畏怖と忌避。

「なんてこつた、また神隠しが起きちゃった」

「『また』つて、前にもあったのか」

疑問を呈す玄を上目遣いに窺い、初老の村人が言い募る。

「死んだ爺さんから聞いた話じゃ。十江村じゃ祭りのため」

に稚児が消える、神社を発つた行列がぐるり巡つてくると毎度の如く数が足りん。生贄に捧げられた子の祟りとも山神のしわざとも言われとる。前回は明治か大正か……村人総出で山狩りしても結局見付からなんだ」

「てめえら正気かよ、今の時代に神隠しつて……ガキは迷子か誘拐だ、くだらねえことほざいてる暇あつたら駐在呼んで来い！」

切羽詰まつてがなりたてる息子をよそに、険しい形相であたりを睥睨し、おもむろにしゃがみこむ。

「見ろ」

地面に落ちた毛を掴まむ父の傍らで玄が息を飲む。山伏が拾つた毛は根元まで美しい黄金に染まつていた。

「野犬……じゃねえよな。蛍光塗料ぬつてるわけでもねえのになんで光つてんだ？」

みるみる毛の輝きが失せ、かと思えば透明になっていく。夜風に吹き散らされた毛の行方を追い、呆然と立ち尽くす山伏と並び、玄もまた絶句する。

「どこだみどり、父さんがきたぞ！」

吉田が半狂乱で現場付近を駆けずり回り、大人の動揺が子供たちにまで伝染し、さらに泣き声が高まつて収拾が付かなくなる。

村長が首頭をとつて捜索隊を招集し、駐在が応援のバトカー

を呼び、あたり一帯が騒然とする。

普段の温厚さをかなぐり捨てた吉田が、凄まじい剣幕で権現の操り手をなじり倒す。

「大人が付いていながらどうして目を離した、あんた達がちゃんと監督してないからみどりは、うちの子はっ！」

「気持ちはわかるが落ち着いてください吉田さん、権現様の中の人に当たつたつてしょうがないだろ」

「わかつてたまるか、真由美に死なれた挙句みどりまでいなくなつたら俺はひとりぼっちじゃないか！」

村長以下男たちが吉田を羽交い絞めにして引つべがす。哀れな父親が泣き崩れ、山伏親子を含む群衆の顔を赤いランブが照らす。

結果として吉田みどりは見付からず、この日を境に忽然と姿を消してしまった。

「はあ、はあ、はあ」

茶倉練は十江山の頂上を目指していた。左肩にはスポーツバッグ、右手には紙袋。ハイブランドのスーツを着ていなければお上りさんに見える。

目の前には森林を切り貫いた石段が延び、緑翠の木漏れ日が落ちてゐる。

所々ひび割れた石段を踏み締め、絶えず伝い落ちる汗を拭い、遙か遠いゴールを睨む。

「まだ着かんのかい。前より長くなつてへん？」

嵩む疲労に比例し愚痴が増える。何度目かわからぬ休憩を入れ、すっかりぬるまつたペットボトルのお茶で渴きを癒す。

成願寺詣では数年ぶりだ。

前回前々回もやつぱり石段に苦しめられた。

せめてトレッキングシューズを履いてくるんだつたと悔やめど遅く、靴擦れで足が痛む。

中敷きが蒸れて気持ち悪い。嵩張る手荷物の重みも無視できない、道中何度捨てて行こうか悩んだことか。

「あゝしんど。帰りたい」

鳥の囀りや虫の声も鬱陶しいだけで慰めにならない。キャップを嵌め直した際袖がめくれて手首が覗き、ブラックオニキスの数珠が陽射しを跳ね返す。

くすくす、くすくす。
くすくす、くすくす。

樹冠が日輪を濾して暈す空の下、葉擦れの音に紛れるようにかすか遠く、ともすれば近く、甲高い笑いが弾けて降り注ぐ。

「子供の笑い声……？」

胡乱げに目を眇めて枝葉を仰ぐ。気のせい？ きつとそうだ、こんな山奥に子供がいるはずない。もとより麓の集落は過疎化が進み、若者の姿は全く見当たらなかつた。

背広に畳んで入れたチラシの存在を思い出し、心が塞ぐ。

「もうひと踏ん張りや」

小さくひとりごち、スマホの待ち受けを見て元気をチャージする。

しばらく行くと巨大な山門が視界にせり上がり、堂々たる仁王立ちの山伏が迎えた。

「重畳、重畳」

豪放磊落に破顔し、片手を挙げる山伏にうんざりする。

「頂上とひつかけたダジャレかい、しようもな。御託はいらんから迎えにこい」

「都会暮らしは足腰がなまっていかん。俺は毎日上り下り

してるぞ」

「野猿か」

山伏―煤祓せいでい正せいが呵々と笑い、見渡す限り緑の眺望に顎をしゃくる。

「十江山は山伏の修行場。これもまた鍛錬の一環、俗世の煩悩を一ツ一ツ捨て去る行と心得よ」

「百八段以上あつたけど」

「個々人の欲の数に対応してるわけ」

「これがホントの歩合制、て納得でけるかい」

「ほら頑張れもうすこし、あんよが上手あんよが上手」

手拍子で囃す山伏に青筋を立て、最後の数段を根性だけで這い上り、門に数センチ届かず力尽きる。

「よくやつた。感動した」

「同情すんなら水をくれ。キンキンに冷えたヤツ」

正が両手を突き出しお茶目に催促する。

「通行おほの手形」

眉根と口端がピクピク痙攣。

「ドタマかち割つたらか」

「手ぶらじゃ敷居跨がせないぜ」

茶倉は東京東村山の銘酒・屋守を持参していた。正がどうしても欲しくれなきやだやだとメールを打って寄越したのだ。コイツがなけりや行きも少しは楽だった。

「宿泊費代わり。現金むしらないだけ良心的だろ」

露骨な舌打ちと共に紙袋を突き付ける。

「おほっ！」

いそいそ中を漁り、熨斗を巻いた名酒・屋守おほのに頼たずりする正。

「会いたかったぜ屋守」

一升瓶に暑苦しく接吻する中年を冷やかに睨み、スポーツバッグを足元に置いた茶倉がげんなりする。

「バリアフリーに配慮してエスカレーター付けるか麓に移転せえ」

「楽して上がったらずるだろずる」

「マニ車回すのはずるちやうで」

「幸せは歩いて来ないだから歩いて行くんだぜつて昭和の大歌手も唄つてんじやん」

「平成生まれなんで」

「大前提として山寺は山にあんのがステータスだし？ 麓に移したらただの寺だし？」

「きつしよ、おっさんがいちいち語尾上げんなや。若もん受け狙とるんかい、寒いで」

「来る途中神社あつたらろ」

「神仏習合の精神で間借りさせてもろたらどないや」

「あつちは鎮守の社、こつちは天狗が開祖の古刹。ちゃん

ほんしたら罰当たりじゃねえか」

「屁理屈よせ、アンタ山麓修験者やん」

山伏は三種に大別できる。山内修験者、山麓修験者、末派修験者がそれである。

このうち山麓修験者は妻帯修験者とも呼ばれ、肉食や妻帯を禁じる山内修験者と異なり、妻を娶り子をなし、法燈を世襲することが許されている。サラリーマンと兼業の者も多い。

成願寺の宗主・煤祓正も嘗ては会社勤めの傍ら修行に励み身だった。

「何年ぶりだ？ 仕事は順調か」

「がっぽがっぽ笑いが止まらない」

「世司さんとは会つてんのか」

茶倉がこの上なく嫌そうな顔をし、正は失言を悔やむ。

「ババアの近況なんぞ知らんしどうでもええ。胸糞悪い」

茶倉世司と孫の仲の悪さは界限で有名だ。一時期は跡取りと見込まれたものの現在は独立し、都心にオフィスを構えている。

正の背後に突如として影がさし、白いかたまりを投擲。

「ぶっー！」

塩の洗礼にたまらずむせる。

「敷居を跨ぐんじゃねえ疫病神」

「おい玄、一応客人だぞ。力士じゃあるまいし出会い頭に塩撒くヤツがあるか、そもそもうちは寺、浄めの塩を用いるのは神道だ」

「邪道は承知。単なる嫌がらせだ」

男の名は煤祓玄。正の一人息子にして成願寺の正式な跡取りである。

口に入り込んだ塩をべっべつと吐き捨て、気取った手付きでスーツをはたき、落ち着き払って断言。

「二十三万七千」

「あ、？」

「おどろが塩漬けにしたスーツの値段。弁償せい」

「サバ読んでんだろ絶対」

「書面で請求するで」

「山にアルマーニ着てくるアホの自業自得。メス熊の視線でも気にしてんの？」

「残念どっばずれ。節穴には違いわからんか、コイツはフランコ・プリンツイバアリー、イタリアンスタンダードスーツの代名詞。万年革ジャンの勘違いバイカー崩れが、人様のフアッションにケチ付けんな」

「虫よけに着てんだよ」

「ワックス臭いもんな、そら蚊かて寄つてこんわ」

「んだとこら」

「そこまで」

火花を散らす二人の間に割り込み、正ががりがり頭を掻く。

「いい年して喧嘩すんな、長え付き合いだろ」

「会いたなかつた」

「俺のセリフだ」

茶倉練は煤祓玄の天敵だ。

逆も然り。

二人は十数年来の腐れ縁だった。

「積もる話の中で」

正に導かれて門をくぐり、申し訳程度に掃き清められた境内を突つ切る。

「葉っぱ多」

「男所帯で手入れが行き届かねえのさ。倅の無礼は許せ」

「詩織さんは残念やつたな」

「香典どうも。分厚くて仰天した」

「クリーニング代こみ」

訝しげな正にそつけなく付け足す。

「昔、な。洗濯してもらた」

「居候中の話か」

合点がいつたらしく頷く。

「線香あげてくれ。アイツも喜ぶ」

「ん」

珍しくしんみりする茶倉の後ろ、玄が父の背中を睨み付け、小声で腐す。

「……てめえが山出てる間にぶつ倒れたんじゃねえか。見殺しも同然だ」

寸刻止まり、平静を装い歩みを再開する。

黙殺されたのが癪に障り、語気荒く罵倒せんとした玄を遮り、茶倉が底意地悪く笑む。

「そーゆージブンは何しとつたねん。ええ年こいてバイク

で自分探し？」

「！ ツ、」

玄が赤面し、拳を握りこむ。

「実家嫌で寄り付きもせんで、文句だけたれるんはフェアちゃうで」

「赤の他人がウチの事情に口出すな」

「自慢のハーレーダビットソンは？ 金欠で売り飛ばしたん」

「山寺に置けるわけねーだろ、常識で考えろ。麓の駐車場借りて止めてる」

「親不孝もん」

「そつくり返すぜ、茶倉はテメエの代で滅ぶつてもつぱら評判だ」

「ほな養子こい」

「あ、？」

眉尻を上げ凄む玄を流し目で牽制し、斜に構えて挑発する。

「関東一円最強の拝み屋の名前が欲しいんやろ？ ババアの肩揉んで機嫌とれ、俺の靴磨けば推薦したる」

「ざけやがって!!」

玄の激発と同時に正が動く。

「ノウマクサンマンダバザラダンカン」

不動明王の真言を唱え、茶倉の顔面に迫る拳を分厚い掌で

受け止めるや、倅の脳天に拳骨を落とす。

「これ以上続けんなら雁首揃えて叩き出すぞ」

「コイツが絡んできたんだ」

「会話のデッドボールやな」

両者とも決まり悪げに舌打ちしてそっぽを向く。

案内された先はだだっ広い本堂。正が一本下駄を脱いで縁側に上がる。

「茶あ淹れてくる」

父親不在の間、玄は柱によりかかり招かれざる客を睨み据えていた。

祭壇に飾られた夫人の遺影に会釈したのち、鉦を叩いて合掌する。

ほどなく正が戻り、座布団を勧めて麦茶をだす。

開け放した障子の向こうから爽やかな風が吹き込み、静謐な境内を囲む借景の緑が冴え渡る。

着替えを入れたスポーツバッグを下ろし、膝を揃えて座り、コップの麦茶を呷る。

「しばらく厄介なるで」

「それは構わんが、事務所の経営は大丈夫なのか」

「スケジュール調整済み」

「きゅうせん様の具合は？」

「お見通しかい。ほな白状するけど、問題ないとは言えへ

んな」

観念しため息を吐く。

修験者・煤払正は茶倉練の秘密を知る数少ない同業者だ。

より正確には正の父にして玄の祖父にあたる冥安めいあんが世司の知己で、一族の事情に通じていたのだ。

その祖父も既に他界し、今は正と玄のみが山寺に暮らしている。

「ここに来た目的は心と体のメンテ。前の仕事でちよい無茶してもて、きゅうせん様の状態が不安定やねん」

「ウチは保養所か」

「温泉湧いとりや言うことない。車が通れん辺鄙な山寺は思索向き、都会の喧騒離れて身の振り方考えたい」

日水村の体験を話した所、正はさらに厳しい顔になり、茶で喉を潤して推論を述べる。

「なるほど、きゅうせん様の故郷は日水山か」

「一緒に封じたる思たんやけど」

「急いては事を仕損じるぞ。きゅうせん様はお前の体に深く根付いとる、力ずくで引っこ抜けば宿主とて無事ではすまん」

「だましまし折り合い付けてやってくしかないか」

正は茶倉の貴重な相談相手でもある。見た目は天狗と言っても通りそうなむさ苦しい中年男だが、霊山で過酷な修行

を積み、加持祈祷をこなしてきた神通力は本物だ。

茶倉も親子ほど年の離れた正に対しては、比較的素直になれた。

「ま、美味しい空気ならただで吸い放題だ。ゆつくりしてけ」

「話は終わつたらん」

鷹揚に受け流す正をまつすぐ見詰め、ずばり切り込む。

「いらたか念珠が欲しい」

「……本気か？」

正の顔が俄かに引き締まり、眼光が凄味を増す。

いらたか念珠とは最多角・伊良太加・刺高とも書き、煩悩と同じ百八の珠を用いた数珠である。修験道では読経や祈禱、ないし悪魔祓いの際に用いられる。

「護身の呪具の類なら呪い蔵にしこたまあるだろ」

「出禁やもん」

「世司さんに頭下げて」

「笑えん冗談。ウチの確執知らんとは言わさへんで」

茶倉練は茶倉世司直系の孫で、関東一円最強の拝み屋と名高い、茶倉一族の跡取りと見なされていた。祖母と決別し、家を出るまでの話だ。

茶倉がスーツの片袖をめぐり、生白い手首をさらす。

「厄種がまた暴れださんとも限らん。この際手段の選り好みしとれん、使えるもんはなんでも使たる」

青い静脈を透かす手首を凝視し、正の顔がかすかに強張る。「直接ここに来てそれを言うつてことは、覚悟があるんだろうな」

くどいほど念押しする正に真顔で話す。

「……風邪ん時、乗つ取られかけた」

「暴走か」

「封印の力が弱まつてる。自分の体のこつちや、わかるんや。じき御しきれんようになる」

「で、切り札が欲しいと」

正が腕を組んで唸る。

「市販のブツは役立たん。自分で力を籠めな」

「理屈はわかった。とはいえ一週間つてのはなあ……普通は十年かかるぞ」

「前倒し上等」

「大きく出たな」

「^{ウツ}茶倉には修験者の血も流れとる。先祖伝来有難いバフ利いどんねん、本気出したら余裕でイケる」

啖呵を切る茶倉に呆れ半分脱力半分、片膝立てた正がぼやく。

「自惚れがすぎると天狗になるぜ」

「もたもたしとつたら手遅れや」

数日前の出来事が脳裏を過ぎる。

夢で得体の知れない法師と邂逅し、きゆうせんに体を乗っ取られた後悔が胸を蝕む。

「俺が主で化けもんは従。下剋上は許さへん」

静かな決意を表す茶倉を見返し、物憂く諭す。

「たるんだ手綱を締め直そうつて心意気は立派だが、生き急いでるようで危なっかしいぜ」

正が腰を浮かす。

「稽古か」

呼び止める茶倉を振り仰ぎ、顎で離れを指し示す。

「来い」

成願寺の敷地には矢場が設えられていた。渡り廊下を歩きながら正が聞く。

「うちの矢場使うのどれ位ぶりだ」

「十五年」

「稚児の戯ざ以来か。おい玄、あの時何歳だっけ」

「……十三」

昔懐かしむ父の問いに、最後尾の玄が不承不承答える。

「てことは練が十一か、二歳差だもんな」

十五年前、成願寺に名だたる術者の子弟が集い力比べをした。

発端は拝み屋たちの見栄の張り合い。

当時最前線で活躍していたいずれ劣らぬ曲者ぞろいの術者たちが、どの跡継ぎが最も強く賢く優れているか論議し、蠱毒の実演場として成願寺を選んだ。

互いの祖母、そして祖父が発起人たれば、茶倉と玄の出陣は必定。

「昔は仲良かったのに、なんでぐれちまったかね」

「仲良くねえ。最初っから嫌いだった」

「同感」

間髪入れず玄が突っ込み、茶倉が鼻を鳴らす。正が理解に苦しむように首を傾げる。

「二人で組んで腕試し肝試ししたじゃん」

「足手まといはいらんかった」

「お互い様だ」

「練が具合悪くしてぶっ倒れたら玄がおぶつて助けを呼びに」

「ウチで死なれちゃ困るからな」

玄の反応はそっけない。

板敷の矢場に茶倉を通し、壁に飾った弓矢を貸す。

「やってみる」

「背広で？」

「技量に関係ない」

「ごもつとも」

茶倉の家を出てからも週一で矢場に通っていた。腕と勘は鈍つてない、はず。

艶やかに磨き込まれた床板を踏み締める。弓に矢を番え、遠方の的に狙いを定めて引き絞り――

『ホンマに縁切りたいか。方法ならあるで?』

風切る唸りを上げて飛来した矢が的を穿ち、瞬く。茶倉が射た矢はほんの僅か中心から逸れていた。

「芯がブレたな」

正が顎をなでて評し、玄が溜飲を下げる。

「だっせえ」

「病み上がりで調子でえへんだけや」

仕切り直し。足を開く。踏み構える。瞬きせず静かに的を映し、弓を引き絞る。

思考が澄む。

心を無に帰す。

『全部おつかぶせてしもたらええねん』

雑念が集中を妨げ、指の震えが弦に伝播し、またしても狙いを外す。

「くそ」

舌打ち。次、また次。何度挑戦しても同じ結果に終わり、もどかしい焦燥が募り行く。玄は飽きてあくびをし、正が待ったをかける。

「矢の無駄だ」

「もっべんだけ」

「心の濁りが矢筋を曲げる」

往生際悪くせがむ茶倉の手から弓と矢をひったくり、矢場に立った正がキリキリ弓を引く。

「ノウボウ・アキヤシヤキラバヤ・オン・アリキヤ・マリ・ボリ・ソワカ」

野太い声が唱えるのは技巧向上を促す虚空藏菩薩の真言。

豁然と見開いた眼が気炎を噴き上げ、鍛え抜いた四肢に闘気が充ち、場を圧するのを待つて手を放す。

風切る音が疾り、新たに放たれた矢が茶倉の矢を弾いて凶星を射抜く。

「煩惱まみれだぞ」

「やかまし」

弓矢を奪い返した直後、腕が重く怠く強張つてその場に跪く。

「あ、ぐっ」

何かが体の奥底に根を張り脈打ち、全身の毛穴をこじ開け汗が吹き出す。

「練！」

腹を庇い蹲る茶倉に駆け寄るや、玄が息を飲む。

「休めば治る」

「宿坊に連れてけ」

「自分で歩く」

「酷い顔色だ。修行は明日からにして寝ろ」

正がきびきび命じ、玄がぐったりした茶倉に肩を貸して歩き出す。

矢場を離れてしばらくすると茶倉は回復し、憎まれ口を叩く。

「嫌いてゆうてへんかった?」

「親父の頼みだ」

「十五年前と同じやな。俺を背負うて布団に連れてった」

「まだ覚えてんのか。とつとと忘れる」

「雑魚しかおらん、ホンマしようもない見せもんやった」

「この野郎……」

稚児の戯は七日七晩執り行われた。

他の子たちが一人また一人と再起不能に陥り脱落していく中、最後に残ったのは練と玄の二人。

「乗り気じゃねえなら棄権すりやよかったのに」

玄はハッキリ覚えている。山寺を逃げ回る子供たち。呪われ呪い返し、最後の一人になるまで繰り返し……

「詐欺じゃねえか、あんなの」

当時の怒りと屈辱が沸々と甦り、渡り廊下を支える柱に練を押さえ込み、顔の横に手を突く。

茶倉は怯むでもなく玄を見上げ、囁く。

「負けたこと、まだ根に持つとるんか」

頭の中で赤い閃光が炸裂し、思いきり突き飛ばす。廊下に尻餅付いた茶倉は喉の奥で笑いを泡立て、言った。

「お生憎様」

「……化けもんでしかイけねー体のくせに」

茶倉練は化け物の苗床だ。祟り神に憑かれている。十五年前、共に生活していた頃、玄は目撃した。

隣の布団に寝ていた茶倉が、夜毎見えざる「何か」に犯され、悶え苦しむ痴態を。

玄が踵を返した後、柱に縋って立ち上がり宿坊へ向かいながら奥歯を噛む。

「好きでこんななつたんちやうわ、アホんだら」

翌日から修行が始まった。茶倉は宿坊に寝泊まりし、毎朝四時に起床する。

修験者が用いられる真言は生活に密着している。

「オン・バサラ・チシユタ・ウン」

布団から出てすぐ眩き、井戸端で沐浴をすます。

隅々まで身を浄めたのち袈裟と鈴懸に着替え、卸したての念珠を首に通す。

本堂へ繋がる渡り廊下の先では、朝餉の膳を持った正が待ち受けていた。

「似合ってるじゃないか」

「コスプレ感が否めん」

「勤行中は肌身離さず付けとけよ」

本堂に移り、向かい合わせで精進料理を食す。

「オン・アミリテイ・ウン・ハッタ・ソワカ」

甘露尊に祈りを捧げ箸をとる。

本日の献立は白飯に味噌汁、湯葉・麩・椎茸の炊き合わせ、こんにやくとごぼうの和え物に青菜のおひたし。味付けは淡泊でいまいち物足りない。

「動物性たんぱく質恋しいわ」

「美食を戒め粗食を寿ぐのが精進料理の大義だぜ」

「朝は洋食派やねん」

「ブツクサ言うな」

箸の先で沢庵をひねくり回す。

「味は悪ないけど、薄い」

「明日の当番はお前な」

「は？」

朝食後、正に付いて山に赴く。

十江山には鬱蒼と木々が生い茂り、鳥が羽ばたいていた。

正の背中を追って起伏に富む獣道を進む途中、なにげなく聞いてみる。

「悴はサボりかい」

「強制はしてねえよ」

「跡継ぎやろ」

「俺の代で畳むか迷ってる」

意外な発言に虚を突かれ、憎まれ口が遅れる。

「法燈絶やしたらじいさんが化けて出るで」

「加持祈祷で食ってける時代じゃねえだろ」

「物分かり良いな」

「悟りの境地つてヤツさ」

茶倉に背を向けたまま、岩に手を掛けひとりごちる。

「昔は継ぐ継がねえで大喧嘩やらかしたもんだが、女房くたばってからどうでもよくなつちまつた」

正の妻・詩織は庭の掃き掃除中に倒れ、搬送が間に合わず息を引き取った。死因は脳卒中と聞いていた。

「お前の言うとおり、麓に住んでたら助かったかもな」

行く手を塞ぐ倒木を跳び越え、諦念を織り交ぜた笑みを刷く。辛気臭い空気を疎んで話題を変える。

「この下駄めっちゃ歩きにくい」

「体幹鍛えられるぞ」

「どこ行くねん」

「滝」

一本歯の下駄に難儀しながら歩いてきた茶倉が表情を消す。

「腹から声出せ」

「やっとなるわ!」

「肺活量の限界に挑め!」

山育ちの正は筋骨逞しく頑丈だ。五十路をこえても肉体は衰え知らず、飛沫が白く煙る滝壺で打たれても微動だにし

ない。茶倉はガチガチ歯の根を鳴らす。

「寒ッ……」

「裸で慣れてんדר」

「朝シャン感覚で滝行すな蛮族」

「頭皮刺激で血行促進、これぞ山伏式滝壺マッサージの極意」

「寒水摩擦は人類に早すぎん？」

びしょ濡れの着物を張り付けくしやみをする。

「サウナ入りたい……」

「そのへんぐるって走ってきたらあつたまるぞ」

正が屈伸しながら提案。哀しいかな、山伏は脳筋だった。

「さぶいぼ出たわ」

上腕をしきりに擦り、震え慄く茶倉の背中を一瞥、薄衣が透かす傷痕に眉をひそめる。

「温泉湧いてへん？ 天然の。この際スパー銭湯でも文句言わん」

「猿と混浴するか」

「アンタがまざたら見分け付かん」

「自分で掘れ」

「ドクターフィッシュ放た足湯で勘弁したる」

「何それ？」

「角質食うねん」

「メダカじゃだめか」

「煮魚なるで」

お次は岩場。断崖の突起を掴んですいすい行く正に遅れること数メートル、茶倉がへつぴり腰でずり落ちていく。

「ジムでボルダリングやったのに」

「滑る方が得意みたいだな、青年」

崖の上に至つた正が竹皮を開き、塩むすびをパク付きながら声援を飛ばす。

昼は手分けて薪を持ち寄り、壇を組んで火を焚いた。

「山火事大丈夫なん？」

「延焼には気を付けてる」

「さよか」

修験者は山中で護摩壇をする。茶倉も正に倣つて経を唱え、火を絶やさぬように見張りをした。

「あかん、眼球乾く……目薬もつとる？」

「あるわけあるか」

正が心底あきれはてる。

「奥の沢に水湧いてつかから目ん玉かっぽじって洗ってこい」

「おおきに」

一旦離脱して奥へ分け入り、清らかな湧き水で顔をすすぎ、手のひらにすくって飲む。

生き返つた心地で顔を上げ、手拭いで雫を拭っている時、

異様な遠吠えを聞いた。

「なんや」

空気の震えが水面に波紋を起こす。犬でも狼でもない「それ」は、間延びした声で啼いている。

声が響く方へ自然と体が動く。名伏し難い好奇心に駆られ、藪をかき分け進むうち、謎めいた気配がどんどん濃くなる。

「あははっ、待ってー」

場違いに無邪気な声が響き、靴を掠めて笹舟が過ぎゆく。

沢を潤すせせらぎの出所に神寂びた岩室が穿たれていた。どこことなく天岩戸を彷彿とさせる見た目で、全体が湿った苔に覆われている。

好奇心が打ち克つて洞を潜り、抜けた先に澄明な光が降り注ぐ。

空気の変化を肌と匂いで感じとる。

岩戸の奥で遭遇したのは、赤や緑の袴を穿き、天冠や烏帽子で飾り立てた稚児たち。

ある少年は小枝を振り回し、ある少女は木の実を摘み、仲良く楽しげにじやれている。

桃源郷に迷い込んだ錯覚に襲われ、目を見張る。

あたり一面に千朵万朵と咲き乱れる四季折々の花々。梅、

桜、藤、椿、曼殊沙華。

それらが万華鏡の如く極彩色に敷き詰められ、馥郁たる薫りを振り撒く。

風車を回す子がいる。木の枝に腰掛け笛を吹く子がいる。花畑で取っ組み合い、上になり下になり転げ回る子たちがいる。

「待ってよー」

友達と追いかけてこしていた稚児の一人が茶倉に衝突し、よろけてへたりこむ。

あどけない顔が強烈な既視感を呼び起こす。

「吉田みどり？」

本名を呼ばれた衝撃はいかばかりか。少女の顔が驚愕に凍り付き、不吉なざわめきが広がっていく。

「大人のひと？」

「どうして？」

「ごんげんさまの結果が……」

目の前で転んだ少女が起き上がり、思い詰めた様子で継り付く。

「おねがいお兄ちゃん、私がここにいることお父さんやみんなに言わないで」

「ッ！」

直後、烈風を巻き起こし獅子に似て非なる何かが乱入する。

金のたてがみを嫋嫋と靡かせ、四足の蹄で地を蹴立てる美しくおぞましい異形は、中国の神獣・麒麟ないし白澤に姿を似せていた。

謎の獣が猛々しい顎あごを開いて茶倉を威嚇し、可聴域の範囲外で嘶く。

音の連なりとして知覚され得ぬ咆哮が波動と化し、鼓膜をビリビリ震わす。

世界の関節が外れたように景色が歪み、混沌と色彩が渦巻く。

満開の桜が青く冴え、たわわにしなだれた藤が金銀に光り、

玉色の光沢帯びた曼殊沙華がドドメ色に爛れゆく中、子供たちが逃げ散っていく。

「あやかし……ちやうな、山神の類か。ガキどもは眷属？」にしては妙だ。子供たちから感じた気配は生者と亡者の間、どちらでもあつてどちらでもない半端もの。

風が絶えたのを確認後目を開ければ、謎の獣や子供たちはおろか、花畑までも消え去つていた。

周囲は鬱蒼とした森に戻り、ひんやりした木下^{こしたやみ}闇が身を浸す。

されど夢でも幻でもない証拠に、茶倉の足元に黄金の毛が落ちていた。

地面に散らばる毛を数本採取し、何食わぬ顔で正と合流を果たす。

「遅かつたな」

「迷子がおつたで」

「こんな山奥に？」

「吉田みどりや」

正の顔色が瞬時に変わる。

夜、本堂にて。

沐浴を済ませた茶倉は浴衣に着替え、正の晩酌の相手を務めていた。

「坊主で酒豪で罰当たりやな。不飲酒の戒はどないした」

「般若湯は智慧に至る手助けとなる煎じ薬だぜ？」

茶倉の手土産を待ちかねたように開封し、二杯分の猪口にトクトクと分けて注ぐ。

猪口に満たした酒を一気に呷つた正が太い息を吐き、修行の疲れも吹っ飛ばす至福の笑みを浮かべる。

「くうっ、五臓六腑に染み渡るぜ。この一杯の為に生きてるって感じだな」

「一杯ですんだことあらへんやろ」

「遠慮せずぐいっといけ、ぐいっ」と

「何べん捨てよ思たか」

「昼間はへばつてたな」

「体力無尽蔵の山伏と都会人比べんなや」

話が一段落付いた頃合いを見計らい、懐から一枚のチラシを取り出す。

「村に着いて早々、けつたいなおっさんにコイツを渡された」

茶倉が床に滑らしたのは、吉田みどりの消息に関し、情報提供を呼びかけるチラシだった。

正が沈痛な表情を浮かべ、猪口に注いだ地酒を呷る。

「吉田さんだな」

「父親か」

チラシには小学校低学年とおぼしき少女の写真と共に連絡先が記載されていた。

「吉田さんはスローライフとやらに憧れて村に越してきた。ところが奥さんが余命宣告うけて、治療の甲斐なく亡くなっちゃった」

「癌？」

「末期の」

吉田みどりの失踪は謎が多く、当時はマスコミに騒がれた。

「誘拐ちゃうのん」

「それはない。狭い村人中だ、不審な人間や車が入りやすすぐ気付く」

「祭りの日はよそもん押し寄せたのに？」

「稚児行列に付き添いが許されるのは権現様のほか灯持ちの大人だけ、保護者は境内で待機するきまり。変なの尾行してたらバレバレ」

「コケるで、危なっかしな」

「子供の無病息災を祈り七転び八起きの精神を叩き込む方針」

「生臭坊主が適当こいて」

「すまん」

正が素直に頭を下げる。大分酔いが回っているようだ。

茶倉が人さし指で唇をなぞる。

「案外身近なヤツが犯人かも」

「お互い見張り合ってるような環境だぞ、連れ去りに成功したつてどこ隠すつてんだ」

妻に先立たれ一年もたず娘までも失った吉田には、当然の如く同情が集まった。

「まだ村におるん」

「娘の帰りを信じて待つてる」

「十年？」

「頭じゃわかつてても諦めきれねえのが親心だ。しかしまあ、子供がひとり消えたんだ。さすがに祭りどころじゃなあって、行列の方はずっと中止されてたんだよ」

「されてた？」

「今年はやるんだと」

猪口に注いだ酒を呷り、やるせなげに息を吐く。

「え、なんで」

「村興しだよ」

「子供が消えたのに？」

「腐つても伝統行事、中止はともかく廃止はせんぞと頑迷な年寄り連中がごねた」

「時効迎えたんか」

正が膝を掴んで身を乗り出す。

「実を言うとな、みどりちゃんが最初じゃないんだ」

「前もあつたんか」

「何回も」

「ちよつと待て」と言い置いて席を外し、再び戻ってきた正は、古い和綴じの本を持っていった。

「十江村じゃ祭りのたびに子供が消えてる。もともこの村は山神に生贄捧げてた」

「どこもやるこた同じやな」

日水村の惨劇を蒸し返され、茶倉が冷めた目で述べる。

正が眉間に皺を刻んで唸る。

「十江村の言い伝え。娘想いの父親が山伏に泣き付いて、権現さまを説き伏せた。以来生贄の風習はなくなり、捧げられた子の鎮魂のため、稚児行列が始まった……つてのが表向きの記録だな」

「裏があるんか」

茶倉が和綴じの本を開いて目を通す。

「順番が逆やね。山伏殿が権現に陳情する前から稚児行列は執り行われとつた」

「なんでかわかるか」

「わかりたないけど」

猪口に酒を注ぎ足し、豪快に飲み干す。

「『選別』」

「正解」

「娶るにしろ食らうにしろ神さんかて好みの子選びたいわな。村の衆にお披露目兼ねた練り歩きは好都合」

「その昔、十江村の稚児行列は天童行列の別名で呼ばれた。稚児は乳飲み子の略、幼児の別称」

「でもつて、坊さんの下の世話をした小姓の呼び名。仏教は女淫を禁じとるさかい、男色を逃げ道にした」

「年端もいかねえガキを……胸糞悪イ」

「山伏かて困つとつたら」

「俺はしてねえ」

正が断固否定する。

「先祖の罪を数えるんはやめたる」

茶倉が肩を竦める。

「とりま稚児の歴史は古く、平安の世じゃ仏門入りした公家の子弟がそうよばれとつた。女人禁制の僧院で見目麗しい男児が愛でられるんは不可抗力で見方もできる」

「稚児物語が一大ジャンルとして確立されたんだろ？ 世も末だ」

猪口で唇を湿して諳んじる。

「其の肉の腐り爛るを惜しみて、肉を吸い骨を嘗め、はた喰らい尽くしぬ」

「それは？」

「『雨月物語』収録の『青頭巾』。知つとる？」

「いや……」

「快庵禪師が下野の国に寄つたねん。したら鬼が出たてりものもんが大騒ぎ。宿屋の主人曰く、近くの寺に阿闍梨つて高僧がおつたんやけど、コイツの稚児が春先におつ死んだ。阿闍梨は嘆き悲しみ、生きとる時と同じように骸を愛でた」

「うへえ」

「埋葬せなんだら当然腐る。しまいには肉をすすり骨をなめ、ぜーんぶ食い尽くしてもた。以来阿闍梨は迷い鬼と化し、夜な夜な墓を暴いて屍肉をむさぼるようになったつちゅーネクロとカニバの合わせ技のお話や」

「色惚けの末路は悲惨だな」

愉快げにぐる茶倉と対照的に、正は言葉を選んで続ける。
「天童は仏法守護の命を帯び、子供に化けて人間界に現われた天人・鬼神をさす。神道の祭礼においても無垢な子供は神霊の懸かる対象、または神の使いと見なされた。なあ練、お前が見たのは……」

「間違いない。みどりやつた」

「姿変わってねえとかおかしいだろ」

失踪時みどりは七歳。現在は十七歳になっているはず。

「他にもぎようさんおつた。三十人は下らん」

「権現様に連れてかれた稚児か」

「多分」

「『お父さんやみんなに言わないで』つて、穏やかじゃねえよな」

「親子仲はよかつたん？」

「ああ。吉田さんはみどりちゃんを可愛がつてたし、みどりちゃんも懐いてたよ」

正が猪口に酒を注ぎ足し、嘆く。

「祭りに参加決めたのも娘を元氣付ける為かも」

「十年捜し続けるてたいした執念やな」

「あたりめえだ、我が子が消えたんだぞ」

「十七の娘は写真と別もん」

「吉田さん、みどりちゃん蒸発のショックで病んじまつて……誰彼構わず待ち伏せてチラシばらまくもんで、村の連中も持て余してるよ」

警察の捜査は打ち切られた。みどりの生存は絶望的。ただ一人、血が繋がった父親だけが諦めきれずにいる。重苦しい沈黙を破り、正が口を開く。

「……練。みどりちゃんを見かけた事は黙つとけ」

「言われんでもそうするわ。十年前消えたガキが変わらん姿で山奥におつたとか、誰が信じんねん」

正曰く、吉田の精神状態は思わしくないそうだ。

山奥でみどりを見かけたと漏らしたら最後、単身森に踏み入り遭難しかねない。

「子供たちはごんげんさまの結界どうたらて口走つたんだな。言い伝え通り山神にかっさらわれたってオチか？」

「俺に聞くな、そつちのが詳しいやろ」

「十年前、俺と玄も現場にいた」

「へえ」

苦い述懐に興味を示す。

「道筋に変な毛が落ちてた。金色に輝く綺麗な……」

「まだ持つとんの」

「スーッと消えちまった。魔性の毛だ」

「俺もゲットしたで」

開かれたハンカチの上には何も無い。

「からかってんの？」

「まあ待て」

猪口の中身を数滴たらす。

「清めの酒は神道の概念やけど」

雫に濡れた輪郭が浮かび上がる。

「自然界の動植物かて生存戦略に擬態組み込んでんねん、
神さんもイケるやろ」

正体を見破られた怪異は可視化される。裏を返せば、原則として不可視の存在。

十年越しの仕掛けを暴かれ、正が脱帽する。

「天狗の隠れ蓑ね。どうりで騒がれず近付けたわけだ」

「権現の毛皮剥いで透明マントで売り込めば大儲け」

「冗談だよな？」

「半分」

「半分本気なのか……」

ハンカチを畳んで戻す様子、孫に苦笑い、チラシに刷られた写真を見詰める。

「帰してやりてえな」

「十年異界入りしとつたんやで？ 今さら人戻しても馴染めん」

「や」

「やってみなきやわかんねーだろ。明日その岩室に案内しろ」

憤慨して瓶を傾ける正にやれやれと肩を竦め、思案顔で黙り込む。

「妙やな」

「どうした」

「いや……」

本の記述を読み返し、スマホをかざしてシャッターを切る。

正は待ち受けに注意を移す。肌色が見えた。

「彼女？」

「助手」

「高校の同級生だっけ」

「よお覚えとるね」

酔っ払いの詮索に意味深な笑顔を返し、スマホで口元を隠す。

「見る？」

「見てえ」

茶倉が表返したスマホの待ち受けは、行儀悪く布団をはだけて爆睡する、若い男の寝顔だった。

「額に肉じや芸ないし梵字書いといた。油性ペンで」

「鬼か。ていうかコイツ上半身裸……」

「暑がりやねん」

サツとスマホを引つ込め、猪口の中身を干す。

茶倉を交えた晩酌の誘いを断り、縁側の柱にもたれ、障子を透かして落ちる明かりを見詰める。

宴会は盛り上がっているようだ。正は食客とサシで飲んでいる。別に羨ましくはない。

母の死以降父と溝ができた。それ以前から継ぐ継がないの確執はあったものの、拗れ拗れて家庭内別居に陥ったのは、未だに正を許せずにいるからに他ならない。

『本当にお気の毒でなりません。もうすこし発見が早ければ助かったのに……』

享年四十二歳。まだまだ若かった。

霊室のパイプ椅子に沈み、深々うなだれる正と玄を遠巻きにし、看護師が囁き交わす。

『境内に半日放置されたんでしょ』

『旦那さんの山籠もり中、一人でお寺を守ってたのね』

『息子さんはバイクで旅に……』

キツく目を閉じて幻聴を打ち消し、障子に映る影を睨む。

茶倉と会うのは三年ぶりだ。前回ほろくに話もせず別れた。

大人げない自覚はあるがこればかりはどうしようもない。

事の起こりは十五年前、玄が十三の時。まだ健在だった祖父・冥安が孫を呼び出し、こういった。

『玄よ、稚児の戯に出てみぬか？』

『何それ』

『世に名だたる術師の秘蔵つ子を集め、一番優れた者を決める祭礼だ』

祖父曰く、稚児の戯の歴史は古い。その起源は平安の世に遡り、当代の術師たちが、血の繋がり有無を問わず跡取りと見込んだ若手を競わせてきたらしい。

与えられた課題をよくこなし、最強の誉れを得た術師は、様々な恩恵に浴すことができる。

『期限は一週間。奏樂の腕前、祝詞や経文の暗唱、さらには呪術の実践に祓いの作法まで、寝食を共にしながら切磋琢磨し互いを鍛えるのが目的じゃ』

『よくわかんねえけど、出たい』

世間知らずの中学生だった玄は、まんまと祖父の口車にせられ稚児の戯への参加を表明した。

動機は単純に面白そうだったから。

修験者の一族に生まれ、いずれ寺を継ぐ身として、自分と同じ境遇の子供たちに出会ってみたかった。上手くすれば友達ができるかもしれない。

稚児の儀はその年の夏に行われた。

当日成願寺に集まった子供たちの年齢はばらばら。下は十一、上は十八。最年少はまだ小学生の少年だった。

『茶倉さんのお孫さんはまだ小さいからアンタが面倒見たげなさい、弟ほしがってたでしょ』

ああそうだ、お袋にお願いされたんだっけ。

亡き母は優しい人だった。故に最年少の少年を気遣い、年が近い息子と同じ部屋をあてがった。

『ご両親とは早くに死に別れたっていうし、しばらくお婆

さんとも会えず心細いでしょうね』

玄の両親は恋愛結婚だ。

母はどこをとつても普通の人で、修験道の事など何も知らず、稚児の戯さえ舅の知人の子息を集めた合宿程度に考えていた節がある。いわば林間学校の延長、夏休みの思い出作りだ。

無垢材が薫る廊下をひた走り、勇んで襖を開け放ち、和室の中央で体育座りした子供と対面する。

女の子かと思つた、最初は。

障子越しに物音が立ち、ハツとして腰を上げる。

無造作に本堂に踏み込み、仲良く酔い潰れた様子に閉口する。今しがた玄が聞いたのは、空き瓶を手放した音だったらしい。

「誰が後始末すると思つてやがる」

足元に転がつてきた瓶を回収し、柱に寄りかかりうたた寝する客の方を向く。

スーツの膝にスマホが乗っていた。待ち受けは知らない男。何故か額に梵字が書かれている。

嫉妬の熾火が燦る。

規則正しい寝息に合わせ上下する睫毛の長さに惑い、そつ

と顔を近付け、呼ぶ。

「練」

お前が初恋だなんて、死んでも教えてやんねえ。